

れが田舎住まいなのかと、みなさまそういう目で感心してくださるような環境なんですけれど、その日常の起き伏しの中でなにを考え、なにを楽しみに生きてきたのか、まあいろいろありますが、一つはささやかですけども、月に一回学習会をやっております。近所のお母さん方、奥さん方、五十人、六十人と集まってきてくれるわけなんです、ある学習会のときに、もうこれで今日は終わりにしましょう、さよならと、みなさま帰り足にられました。で、わたし、机の前に座っておりましたら、一人のお母さんが、入口とは反対の方向、わたしの方に向って、駆け戻ってみえたいんです。なにか特別なお話があるんだと、様子見ておきますと、「先生、相談したいことがあるんです、聞いてください」と。どういう大変なことかと思っておりますと、そのお母さんの小学校の四年か五年になる男の子が、昭和天皇がご病氣だという噂が立った時期に、「お母さん、天皇はもうじき死ぬね」と言うんです。お母さんは「そうね、お年もお年だし、ご病氣のようだから、もう近いうちにお亡くなりになるかもしれないね」と言ったら、子供は「天皇が亡くなったら、次の天皇はどのようにして選挙するの」と言った。わたしはすごい頭脳の子供さんだなと感心して聞いていたんですが、お母さんは「とんでもないこと

を言うんです。天皇を選挙で選ぶなんて」。お母さんにしてみたら、天皇を選挙で選ぶということ自体がたいへんな不敬罪に値するように、びつくりしていらつしやるんですね。「天皇が選挙で選ばれない、世襲制で代々受け継がれていくものだと思ってお母さんこそおかしいんです。子供さんの方が民主的に育っているんです、子供さんの感覚の方がまともです」とわたしはそう言ったんですよ。どうでしょう、みなさん、みなさんはどうお思いになりますか。天皇が死んで次の天皇は選挙で選ぶと、これは民主的じゃないんですか。選挙で選ぶと言っただけで、不敬罪に値するように恐懼しているとお母さん、そういう教育を受けてきたわけですよ。日本の教育というものが、いかに教育の名に値しないものであったか、間違っていたかということ、結局、そういうことをわたしは申し上げたいわけなんです。

日本国憲法

もうだいぶ古いことになりましたから、記憶はおぼろげなんです、敗戦のあくる年、昭和二十一年（一九四六年）の夏に今度新しい憲法ができる、その草案ができたから、

検討会に出席しろという要請状をもらったんです。わたしはそういう知識はぜんぜんだめなんですけども、新しい憲法とはどういうものか見たかったですから、じゃあと言って、その検討会に参加しました。わたしの隣りにいらした方の名前だけ記憶しております。その頃、婦人運動の第一人者のように言われた奥むめおさんでした。また、わら半紙に謄写刷したその憲法草案を配ってくれたのは、改造社の社長の山本実彦氏だったのです。

配ってくれたものを見ると、びつくりしたにも、あれくらいびつくりしたことはありません。第一条に「天皇は国の象徴にして、この地位は世襲である」とあるんですよ。ほんとうに日本は敗戦国なんだろうかと錯覚しましたね。そして、しばらく時間をおいて山本氏が意見を聞きにきました。「どうでした。今度の憲法いいでしょう」と。奥むめおさんは「結構な憲法でございます」と。山本さん、うれしそうなお顔をしていました。わたしはお世辞にも結構な憲法だとは言えなかつた。第一条に天皇が出てくるとは、夢にも思わなかつた。ですから、山本さんに、「この敗戦国にひょっこり天皇が現れるわけがない、現れたのなら、それは天から降ったんですか、それとも地から湧いたんですか、どっちですか、説明してくれ」と言ったら、山本さ

んは「あんたはいつもそういうふうは無茶を言うんだよね」と。「わたしの言うのは無茶ですか」と言う、無茶だ」と言うんですね。わたしはわたしの言うことが正しいと思っているんです。その天皇はどこから来たかという筋道なくして、いきなり天皇はと言われたら、どこから来た天皇ですかと言いたくなるでしょう。で、わたしの言うのが無茶ならこういう検討会におつても無意味ですから帰りますよと言って、わたしは席を蹴って帰ってきました。

いよいよ公布されたのを見ると、その時の謄写刷のまんまなんです。敗戦国でこういう憲法が行われるというところの民度の浅さといつたらいいですね。その時には、そつちこつちで検討会をやつたと思います。そして、いよいよ施行になるのは、あくる年（昭和二十二年）の五月三日からなわけです。新しい憲法の生みの親だと言われる金森徳次郎が、小田原の方に住んでいた、なんとかというこれは世界的に良心的な政治家を、いま名前は度忘れしましたが、その人を訪ねていくわけです。そして「先生、おかげで、憲法施行記念式典を無事終わりました」と日本一の政治家のところへ挨拶に行つたわけですよ、金森徳次郎が。それが新聞のページ記事になりました、非常に貴重な歴史的な新聞だと思ふもんですから、わたし、現在でもその新聞